徳洲会グループ
TOKUSHUKAI MEDICAL GROUP

発行
一般社団法人徳洲会
〒102-0074 東京都千代田区九段南1-3-1 東京堂千代田ビル14階
TEL：03-3262-3133

制作
一般社団法人徳洲会　広報部
TEL：03-3288-5580　FAX：03-3263-8125
Email：news@tokushukai.jp

ALL LIVING BEINGS ARE CREATED EQUAL

徳洲新聞

TOKUSHUKAI MEDICAL GROUP NEWS

No.1561

湘南厚木病院
循環器内科の診療体制強化
不整脈や虚血性心疾患まで幅広く対応

湘南厚木病院（神奈川県）は地域密着型の急性期病院として診療機能の拡充に努めている。そのひとつが循環器内科の強化だ。以前は非常勤医師を中心とする診療体制だったが、昨年 12 月に着任した小山右文・循環器内科部長を含め常勤医師 2 人体制となり、狭心症や心筋梗塞など虚血性心疾患から心房細動など不整脈治療まで幅広い領域で専門的な治療に注力。厚木市内で唯一の同院心臓血管外科と連携を図り、ハートチームとして今後、より高度な治療にも取り組みながら、いっそう地域医療に貢献していく考えだ。

ハートチームで地域完結を目指す



「地域で完結できるよう高度な医療を含めて提供」と小山部長



循環器内科診療の柱としてカテーテルアブレーションに注力

湘南厚木病院循環器内科に常勤医師として着任したのは小山部長と佐藤大介医師。ふたりとも日本循環器学会専門医や日本心血管治療インターベンション学会認定医などの資格をもち、救急医療をはじめ、さまざまな領域でハイボリュームセンターとして知られる湘南鎌倉総合病院（神奈川県）が前任地。これまで多数の症例を経験し技術を磨いてきた。

小山部長と佐藤医師はそれぞれ得意とする専門領域を分担し、狭心症や心筋梗塞といった虚血性心疾患から、心房細動をはじめとする不整脈疾患まで、幅広い循環器内科疾患に対する診療を展開している。

小山部長は「これまで非常勤の先生方がカテーテル治療を実施してきましたので、設備は整っており、看護師や臨床工学技士、診療放射線技師などスタッフも心臓カテーテルの関連業務に慣れていて、とても協力的でスムーズにスタートを切ることができました。地域の患者さんが市外に出ることなく地元で治療を完結できるよう、高度な医療を含めて提供していきたい」と意気込みを見せる。

小山部長の専門は不整脈治療で、同院の診療の柱のひとつ。とくに不整脈の一種である心房細動の治療に注力し、カテーテルアブレーション（心筋焼灼術）を積極的に施行している。

心房細動は動悸や息苦しさ、胸の圧迫感、めまいなどの症状が現れることが多く、無症状（自覚症状がない）の場合も少なくない。放置すると心原性の脳梗塞などにつながる恐れがある。

薬物療法が効かない心房細動に対する根治療法がカテーテルアブレーションで、不整脈の発生源となっている心臓内の部位を、専用のカテーテルで焼灼し根治を目指すという治療だ。

循環器診療のもうひとつの柱が、狭心症や心筋梗塞などに対する心臓カテーテル治療（PCI＝経皮的冠動脈形成術）。佐藤医師が手がけている。狭心症は心臓に酸素や栄養を送る冠動脈が動脈硬化などで細くなる疾患で、階段を上がった時や早歩きをした時などに「胸が締め付けられる」などの症状が現れる。心筋梗塞は、冠動脈が突然詰まり、心臓の筋肉がダメージを受けてしまう重い疾患。

「循環器疾患は生命にかかわることが多く、早期発見・治療が重要です。気になる症状があれば心房細動や狭心症が隠れていることがありますので、お気軽にご相談ください」と小山部長は呼びかけている。

続けて小山部長は「心房細動に対し当院は現在、高周波アブレーションを施行していますが、2024 年 9 月に保険適用となった新しい治療法であるパルスフィールドアブレーション（PFA）の導入を目指しています。PFA は特殊な電気パルスで心臓の標的部位（心筋細胞）を選択的に治療する新しい技術で、従来のような点ではなく面で焼灼していくイメージですので治療時間が短く、また熱を発生させないため心臓の周辺組織に影響を及ぼす可能性が低いことから、より安全性が高いなどのメリットがあります」と説明する。

救急受け入れ体制も拡充

植え込み型除細動器（ICD）やリードレスペースメーカー、ロータブレーターといった高度な治療の導入も視野に入れている。ICD は皮下に植え込み、つねに心臓の動きをモニターし、致死性の異常な脈を検知した場合には電気刺激を与えて正常な心拍に戻す医療機器。

リードレスペースメーカーは、カプセル型の小さなペースメーカーをカテーテルで心臓の右心室へ送り込み、心壁にフックなどで固定して電気刺激を与え、心臓の規則正しい収縮をサポート。ロータブレーターは石灰化により狭く硬くなった冠動脈に対して行うカテーテル治療のひとつで、専用カテーテルの先端にあるダイヤモンドコーティングされた金属部分が高速回転し、血管内の石灰部分を切削する。

これらは、循環器内科の専門医に加え、常勤の心臓血管外科医師の在籍が施設基準に含まれていたり、同科医師によるバックアップ体制の確保が望ましいとされていたりする治療法だ。

同院は榊健司朗副院長が率いる心臓血管外科と循環器内科がハートチームとして一体となって治療を推進。「たとえば狭心症であれば、カテーテル治療で行うのが良いか、それともバイパス手術を行うべきか、両科の医師が合同カンファレンス（症例検討会）を開き、より良い治療方針を決定するために検討を行っています」（小山部長）。また外科手術前の心機能の評価や術後に不整脈が発生した場合には循環器内科医が対応するなど、連携する場面は少なくない。

循環器内科が常勤体制となり、救急搬送の受け入れ体制強化にもつながった。同院は厚木市の二次救急輪番病院の第一当番病院として、1 週間のうち月曜と水曜の 2 日間の夜間救急を担当。循環器内科では当番日に当直体制を敷き、他の平日日勤帯にもホットラインを通じて救急の受け入れに尽力している。

心房細動アブレーション治療 名古屋病院が2000例達成



2,000例目のアブレーション治療後に記念撮影

名古屋徳洲会総合病院は9月2日、心房細動（AF）に対するアブレーション治療が2,000例を達成した。同治療は、カテーテルを用いて心臓の異常部位を焼灼または冷凍凝固し、不整脈を抑える治療。同院では、昨年12月5日に全アブレーション治療2,500例を達成していたが、この時点でAFのみの実績は1,802例だった。

同治療は、加藤千雄院長が入職した2014年1月にスタート。当時は医師1人体制で、限られたスタッフとともに治療を積み重ねていたが、現在は医師や看護師、臨床工学技士、診療放射線技師など20人を超える多職種チームへと拡大した。

加藤院長は「2,000例という節目を迎えられたのは、スタッフの協力はもとより、治療を受けてくださった患者さん、そして大切な患者さんをご紹介してくださった地域の先生方からの信頼の積み重ねによるものと考えています。あらためて心より感謝申し上げます」と謝意を表す。

同院は、安全で質の高い医療を提供し続けるとともに、地域医療機関との密な連携を一層強化していく方針。加藤院長は「これからも『ここに紹介して良かった』、『ここで治療を受けて良かった』と思っていただける不整脈診療を目指し、チーム一丸となって頑張ります」と意気軒高だ。

深井・湘南鎌倉病院主任部長
世界ロボット外科学会で優秀演題賞「ダヴィンチ5」の手術データを解析



優秀演題賞の表彰状を手に、座長や他の演者と写る深井・主任部長（左から2人目）

湘南鎌倉総合病院（神奈川県）の深井隆太・呼吸器外科主任部長は、米フロリダ州で開催された世界ロボット外科学会（SRS＝Society of Robotic Surgery）学術大会で、「ダヴィンチ5から得られるデータの解析：指導医と修練医における“Time with Force”の違い」をテーマに口演を行い、胸部外科部門の優秀演題賞を受賞した。

同院が2025年7月に導入したダヴィンチ5は、手術部位に加わった力をニュートン（N）という単位で計測を可能とするForce Feedback（FFB）機能が備わる。0.6～6.5Nの範囲で検出可能。この範囲内で鉗子を使用した時間をTime with force（TWF）と呼ぶ。内視鏡カメラを動かすクラッチの使用回数（ECC）、ハンドコントローラー（操作レバー）のクラッチの使用回数（HCCC）、電気メスなどのエネルギーデバイスに通電させるペダルを踏んだ回数（EPC）のデータも取得できる。

口演では、指導医と修練医が施行した解剖学的肺切除28例（指導医群13例、修練医群15例。2群間で患者背景などに有意差なし）のデータを比較し、結果を発表した。

「ECCやHCCC、EPC、手術（コンソール）時間に有意差はなかったものの、TWFは指導医群で短く、有意差を認め、その操作に何らかの違いがある可能性が示唆されました。また、組織把持用の鉗子（フェネストレイテッド鉗子）のTWFはコンソール時間と強い相関があることがわかりました」などとまとめた。

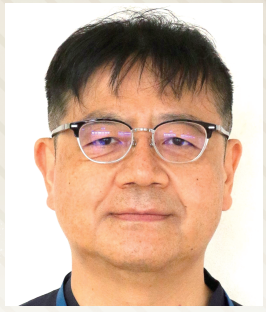
発表後、深井・主任部長は「ダヴィンチ5では、個々の医師が経験をもとに感覚で行っていた手術操作にかかわるデータを取得できるようになったため、数値化して客観的に評価することに関心がありました。こうした研究が進展すれば、将来的には修練医の教育効率の向上や、より安全な手術手技の実施などにつながっていくのではないかと考えています」と展望している。

直言

急性期治療後に可能な限り状態を良くし地域へお返しするのが当院の大きな役割

改善が見込める場合には治療の長期継続も

静岡徳洲会病院 院長 山之上 弘樹（やまのうえ ひろき）



先日、東京本部との8時会のオンライン中継で、東上震一理事長から「静岡のこと、みんな忘れとるやろ！」と言われた静岡徳洲会病院長の山之上です。目立たないのが本分の当院としては、最上の褒め言葉なのですが、本当に忘れられても困るので、最近の当院の状況をお話しします。

ケアミックス型の当院には入院も退院も地域との強力な連携が必須

当院は急性期病棟、回復期リハビリテーション病棟、医療療養病棟、障害者病棟、介護医療院を一つの建物内に持ち、さらに地域包括ケア病棟の開棟も模索しているケアミックス型の病院です。特に急性期で受け入れた高齢の方には、早期からリハビリをはじめ多職種が積極的に介入し、嚥下機能等の評価を行いながら全身状態の改善を目指します。それでも改善に時間を要する場合が少なくなく、そうしたケースでは回復期リハビリ病棟、あるいは医療療養病棟で腰を据えて回復を目指します。医療療養病棟では介護医療院と協力しながら、在宅復帰機能強化加算の算定要件である在宅復帰率50％以上の維持に、病棟一丸となって取り組んでいます。急病の後、できる限り状態を良くして地域へお返しすることが当院の大きな役割であり、時間をかければ改善が見込めると判断した場合には、病棟で治療を長期継続できることが、当院の大きな強みとなっています。

ただ、多くの地方病院がそうであるように、医師数の少なさが当院にも大きな悩みで、以前は、医師が多くの業務を抱え忙殺される状況が続いていました。しかし、近年はタスク・シフト/シェアが着実に進み、以前にも増してチームとしての動きが活発になり、随分と働きやすくなりました。医師事務作業補助者による診療録代行入力・書類作成は、事務負担を劇的に減らし、特定行為看護師のおかげで人工呼吸器管理や創傷処置、PICCカテーテルの挿入、気管カニューレの交換などが包括指示の下、自律的に行われるようになりました。

薬剤師からの処方提案も激増し、感心しながら処方する日々です。管理栄養士からは、食事形態に関する提案も増え、摂食嚥下チームとの協力で誤嚥のリスク低減にも努めています。また、多職種参加のカンファレンスも増加し、多くの角度から検討することで、これまで以上に質の向上を目指せるようになりました。今後もこの方向で進み続け、特に急性期終了後の管理では、医師以外の職種の役割がますます重要になると感じています。

ケアミックス型の当院には、入院も退院も地域との強力な連携が欠かせません。入院面では、消防からの救急搬送はもちろん、高度急性期病院からの下り搬送、そして介護系施設からの自院救急車による搬送に、今後も力を入れていきたいと考えています。高度急性期病院からは、もう少し早い時期での下り搬送をしていただければとも思うのですが、経営的な事情もあるのでしょうか、なかなか件数は増えてきません。ここは診療報酬上のさらなる評価が必要なのかもしれません。

一方、介護系施設からの自院救急車搬送は、手探りの部分もありますが、概ね好評をいただいているようです。出動の際には看護師も同乗するため、施設現場で申し送りを受けることができ、搬送時には施設職員の同乗が不要となるため、人手不足に悩む介護系施設に喜んでいただいています。こうした関係強化は、退院の際のスムーズな連携にもつながっています。

介護系施設へ営業活動を活発化し自院救急搬送体制もさらに拡充へ

今後は、より多くの介護系施設へ営業活動を行うとともに人材獲得を強力に進め、自院救急搬送体制をさらに充実させていきます。また、現場での申し送りは音声入力とAIによる記載を活用し、書類はOCR（Optical Character Recognition）で読み取ったうえで、持参のタブレット端末から電子カルテへ直接入力できるようになれば、所要時間を半分以下に短縮でき、搬送のさらなる効率化に直結します。これ、一般社団法人徳洲会情報システム部の皆さん、なんとかなりませんかねぇ。

「直言」では高度急性期、先端医療のかっこいいお話が多いですが、ちょっと違ったお話になってしまいました。でも、ケアミックスの領域も奥が深いのです。病院総合診療にご興味のある研修医、専攻医の皆さん、静岡でお待ちしております。

皆で頑張りましょう。

葉山ハートセンター

災害時医療救護所を設置 町と協定締結し連携強化

葉山ハートセンター（神奈川県）は9月3日、葉山町と「災害時医療救護所の設置および医療救護活動に関する協定書」を締結した。同協定は大規模災害の発生時に、迅速かつ適切な医療提供体制を確保するのが目的だ。



飯田院長（左から3人目）と山梨町長（その右）が協定書を締結



締結式の後に意見交換を行い、さらなる実効性を高める

協定には、町が同院の敷地内に医療救護所を設置し、逗葉医師会や逗葉歯科医師会、逗葉薬剤師会などの関係機関と連携して運営することを定めている。同院は、トリアージ（緊急度・重症度分類）を行った際、赤（重症）や黄（中等症）と判定した傷病者に対し医療を提供。また、平時から医療資器材のローリング（使用したぶんだけ新しく買い足す）備蓄を行う。相互の訓練にも協力し、災害時の連携体制を強化する。

葉山町役場で行った締結式で山梨崇仁・葉山町長は、「大規模災害時、地域医療の中心である葉山ハートセンターの敷地内に、医療資源を集中できることは大変意義があります。行政と関係機関が連携し、適切な医療が受けられる体制を構築していきたい」と挨拶した。

これに対し、同院の飯田浩司院長は「当院は徳洲会グループの“生命だけは平等だ”の理念の下、すべての患者さんを受け入れる姿勢を大切にしています。大規模災害時こそ私たちの真価が発揮される場面であり、経験豊富なTMAT（徳洲会医療救援隊）とも協力しながら、地域の方々のために、しっかりと対応していきます」と力強く誓った。

両者は今後、同院敷地内でのトリアージ訓練の実施や、近隣自治体との広域的な連携体制の構築も見据え、地域全体の防災力向上に取り組む予定。さらに、発災時の円滑な資機材供給に向けた備蓄品目の見直しや定期的な検証も進め、実効性を高めていく構えだ。

笑顔あふれる夕涼み会

特養逗子杜の郷が開催



やぐらを組んで盆踊りを行い思い思いに楽しむ

特別養護老人ホーム逗子杜の郷（神奈川県）は施設内で夕涼み会を開催した。7月29、30日に行い、2日間で入居者さんが全員参加。近隣の徳洲会グループ外施設からの見学もあった。浴衣姿の職員が雰囲気を盛り上げるなか、縁日ブースでは輪投げや水鉄砲での的当て、芋掘りゲームなどを楽しみ、入居者さんが水鉄砲で職員を水浸しにする場面もあった。また、スイカのムースやかき氷に加え、夕食には焼きそばなどの屋台メニューを提供した。

涼しくなってから、ウッドデッキにやぐらを組んで盆踊りを実施。車いすの入居者さんも音に合わせて手を振り上げ、思い思いに楽しんだ。山本裕・介護主任（ダイバージョナルセラピーワーカー）は「夕涼み会は毎年夏を一気に感じる行事であり、今年も事故なく、たくさんの笑顔が見られたので良かったです」と手応えを示していた。

病気のはなし 235

医療・介護情報をひもづけ

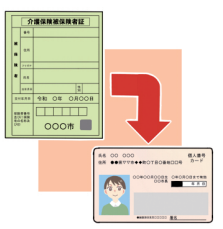
マイナカードと介護保険証

厚生労働省が推進する介護DX（デジタル改革）の施策のひとつとして、マイナンバーカードに介護保険証をひもづける取り組みが進んでいる。4月から準備が整った自治体から順次、マイナポータルでの介護保険証情報の閲覧が可能となっており、2028年4月までに全国で本格運用する予定。

国は、介護DXとして自治体、医療機関、介護事業所がもつ介護に関する情報を一元管理するシステム「介護情報基盤」を立ち上げている。各組織がデータを移行することで、将来的に利用者さんは、認定審査進捗状況、住宅改修費利用など情報、ケアプラン情報などが確認できるようになる見とおし。また、電子化により、これまで紙管理していた介護保険証や各種書類がWEB上での管理となり、紛失などの心配が軽減する。

介護施設や医療機関、自治体にとっても業務効率化につながり、職員の負担軽減、介護の質向上が期待される（共有する情報の範囲、対象は検討中）。

マイナカードはすでに健康保険証とひもづけられており、従来の紙型は今年7月末日に暫定利用も終了。現在、国民健康保険は、マイナ保険証もしくは資格確認書の提示のみで利用可能となっている。自治体によっては子ども医療費受給者証もマイナカードにひもづけており、さらに、診察券をマイナカードとひもづける医療機関も出てきている。今後ますますマイナカードの利便性が高まる一方、情報管理の安全性の担保が課題として浮上している。



徳洲会感染管理部会

感染管理実務担当者を養成

半年にわたるグループ内認定研修開講

徳洲会感染管理部会は 8 月 21 日、一般社団法人徳洲会（社徳）東京本部で 2026 年度感染管理実務担当者グループ内認定研修の開講式を行った。全国の徳洲会グループ病院から感染管理の実務に携わる 15 人の職員が参加。来年 2 月までの約半年間、対面式の集合研修（座学・演習・グループワーク）とオンラインでの研修を重ね、病院の感染管理に必要な幅広い知識や技術を習得していく。



「横のつながりを大切にしてください」と部会長の佐藤部長



螢光物質を汚染に見立て、ブラックライトで消毒状況を確認



一つひとつ手順を確認しながら、フルPPEの着脱を体験

同部会は 23 年度に「感染管理実務担当者 (ICP) 育成コース」を開始。昨年度からは、より実践に即した内容にブラッシュアップするなど刷新、現行の研修となった。旧 ICP コースから数え 4 年目となる。

感染管理認定看護師の教育コースに準拠した内容で、感染管理の実務者として必要な知識・技術を体系的に学べるのが特徴。専門知識をもつ同部会執行部メンバーらが講師を務める。

開講式では冒頭、部会長である佐藤守彦・湘南鎌倉総合病院 (神奈川県) 感染対策室部長が「4 年目を迎え、部会として感染管理の実務担当者を養成する研修会の運営に関して、だいぶノウハウを確立することができました。ぜひ、しっかりと予習をしたうえで受講し、興味をもった分野に関しては、皆さん各自で、より深掘りして学んでいただければと思います。また横のつながりを大切にしてください。閉講式を迎える頃には、自信をもって感染対策の実務に臨めるようになっていることを期待しています」と挨拶。

続いて社徳医療安全・感染管理部の深野明美部長が「皆さんには、ぜひ、ここで学んだことを、それぞれの病院で広げていただきたいと考えています。感染管理はひとりではできることに限りがありますので、病院の感染対策のメンバーと共有し、感染対策の基盤づくりや質の向上に取り組んでいっていただければと思います」と呼びかけた。

同研修会には部会執行部として、副部会長の伊藤恭子・福岡徳洲会病院看護主任（感染症看護専門看護師）、副部会長の松田有司・高砂西部病院（兵庫県）感染対策室長（感染制御実践看護師）、鹿児島徳洲会病院の仮重喜代美・看護師長（感染管理認定看護師）、館山病院（千葉県）の杉田雅央・看護師長（同）、近江草津徳洲会病院（滋賀県）の宇野友美・看護主任（同）が参加し、講師を担ったり、進行をサポートしたりした。

開講式の後、「感染対策の基礎知識（標準予防策）」をテーマに、南部徳洲会病院（沖縄県）の安里千尋・感染管理認定看護師が、医療現場での感染源、標準予防策の実践項目（10 項目）、手指衛生などについて講義。この後、日鋼記念病院（北海道）の加藤美紀・感染管理認定看護師が「感染経路別予防策」をテーマに、接触感染や飛沫感染、空気感染の経路別に予防策などをレクチャーした。

後半は伊藤・看護主任を中心に執行部が講師を務め、PPE（個人防護具）着脱や手指衛生、定量的テスター装置を用いた N95 マスクのフィッティングテスト、輸液ラインのアクセスポートの消毒、集尿容器の回収や口腔ケアの感染対策などに関する教育的手法を学ぶプログラムを実施。ブラックライトに反応する螢光物質を含んだ手洗い評価キットなどを活用し演習形式で行った。最後にフル PPE の着脱訓練を実施。グループに分かれ一日の振り返りを行い、全体発表で共有し、この日の研修を終了。

伊藤・看護主任は「“感染対策は一日にして成らず”です。一滴の水を垂らすと波紋が広がるように、少しずつでも仲間を増やしていきながら、多職種を巻き込み、組織全体で取り組むことが大切です。そのためのアプローチの方法なども、学んでいっていただければと思います」と受講者にエールを送った。

帯広病院

地域の総合防災訓練に初参加
本番さながら300人が臨む



訓練ではドローンや災害救助犬、重機などを投入

帯広徳洲会病院（北海道）は8月21日、地元の音更町と町消防団が主催する総合防災訓練に初めて参加した。防災関連団体の連携強化を目的に、毎年、防災の日（9月1日）に合わせ訓練。今回は町内の消防防災庁舎コミュニティ消防センター屋外訓練場を会場に、帯広消防署や陸上自衛隊、地域の自主防災組織なども加わり約300人で行った。

訓練は台風による大雨を想定し実施。ドローンや災害救助犬、重機、チェーンソーを投入するなど、本番さながらに取り組んだ。

同院は沼田圭介事務長や伊藤志乃・看護部長らが、8月に音更町と締結した「災害時等における相互協力に関する協定」に基づき、福祉避難所として院内に要支援者を受け入れる手順などを確認した。伊藤・看護部長は「想像以上に参加人数が多いことに驚くとともに、日々の診療とは違う形で地域に貢献できる喜びを感じました」と振り返りつつ、「今後も地域の関係各所との連携をいっそう強化していきたいです」と意欲的だ。

武蔵野病院

歯科診療所と連携強化
医療連携懇話会を開催

武蔵野徳洲会病院（東京都）は 8 月 28 日、歯科を対象とする第 1 回医療連携懇話会を開催した。同院歯科口腔外科は北川善政・主任部長を中心に常勤医師 6 人体制と充実し、口腔がんや顎変形症、口腔顎顔面外傷など幅広い疾患に対応。地域の歯科診療所との連携をいっそう強固にし、地域医療の向上を図るのが狙い。約 40 人の歯科医師が参加し盛会となった。

冒頭、開会の挨拶で桶川隆嗣院長は参加者に謝意を表し、「当院の歯科口腔外科は非常にアクティブに診療を行っており、当院になくてはならない診療科です。ぜひ、今後も緊密な連携をお願いいたします」と同科の近況を交えながら呼びかけた。

次に、西東京市歯科医師会の浅野幸弘会長が「専門性を要する症例をいつもスムーズに受け入れていただけるため、安心して日々の診療を行えています。今後も病診の役割分担と連携がさらに進むことを期待しています」と挨拶。

続いて北川・主任部長が登壇。はじめに、北海道大学大学院教授（口腔診断内科学教室）などを歴任後、2024 年 4 月に武蔵野病院に入職した経緯に触れ、「これまで、できるだけ顔を切らずに口の中からアプローチする低侵襲な手術を心がけ実践してきました」と信条を語った。この後、「地域連携における当科の役割」をテーマに、さまざまな口腔外科疾患に対する術式や治療経過などについて、難症例を含む事例を挙げながら紹介した。



歯科口腔外科の充実した現状を紹介する桶川院長



多様な歯科口腔外科診療を説明する北川・主任部長

具体的には、エナメル上皮腫に対する口内法連続離断・腸骨移植による再建、反復開窓処置法、顎関節突起骨折に対する口内法による整復固定術、白板症や扁平苔癬などの口腔粘膜の潜在的悪性疾患、顎骨壊死への対応などだ。最後に田中良太副院長（呼吸器外科）が閉会の挨拶を行い、盛況裏に終了した。

TOKUSHUKAI Medical Assistance Team TMAT Non-Profit Organization

静看協榛原支部の災害看護研修で講義



トリアージの実習を行う受講者と久保・看護師長（左）

NPO法人TMAT（徳洲会医療救援隊）は8月29日、榛原総合病院（静岡県）で開かれた静岡県看護協会榛原支部の災害看護研修で講師を務めた。同支部が研修の講師をNPO法人に委託したのは初。徳洲会グループ内外の看護職80人が受講した。

当日は、TMAT隊員の高力俊策・東京西徳洲会病院院長補佐兼外科主任部長、柳澤修平・四街道徳洲会病院（千葉県）副看護部長、久保健一・湘南大磯病院（神奈川県）看護師長、佐藤哲也・湘南藤沢徳洲会病院（同）看護師がテーマごとに登壇した。

研修内容は、TMATが実施している「国内災害医療支援トレーニングコース」をベースに構成。まず、救急医療と災害医療との違いを説明し、そのうえで災害対応の標準手順「CSCATTT」(Command and Control:指揮と連携、Safety:安全確保、Communication:情報収集・伝達、Assessment:評価、Triage:緊急度・重症度選別、Transport:搬送、Treatment:治療)を紹介した。また、被災者を傷病人としてだけではなく生活者として捉え、生活環境を整えることの大切さも強調。2011年の東日本大震災では、約2万個の老眼鏡を配ったエピソードなどを披露した。避難所での災害関連死を防ぐ段ボールベッドの活用にも触れ、「最も困難な状況にある人のもとへ出向く」というTMATの原則を伝えた。

後半は、災害現場で多くの負傷者が発生した場合に用いるSTART法によるトリアージ（緊急度・重症度分類）をグループに分かれて演習し、多職種連携のポイントを伝えた。参加した看護師からは「ふだんの看護が災害対応の土台になると再認識できました。ハザードマップやトリアージなどを実践的に学べ、貴重な機会でした」と好評だった。

老健シルバーケア常盤平

小学生がハンドマッサージ体験



小学生が一生懸命に入所者さんにハンドマッサージ（左奥が岡村・総看護師長）

介護老人保健施設シルバーケア常盤平（千葉県）は 8 月 26 日、松戸市社会福祉協議会と協働し、夏休み子どもボランティア体験教室「高齢者施設でハンドセラピーをしよう！」を実施した。市内の小学 1 ～ 6 年生 10 人が、講師からハンドマッサージの方法などを学び入所者さんに実践した。

「開かれた施設として、地域貢献や交流を大切にしたいと考えています。ボランティア体験教室もその一環で実施しました」と岡村留美・総看護師長。今年度から年間計画を立て、健康維持体操の実施や地域の夏祭り会場の設営を手伝うなど、地域貢献活動に毎月のように取り組んでいる。

生徒たちはハンドクリームをのばして手のひらで温め、入所者さんの手の甲や指を念入りにマッサージ。「痛いところはありませんか」など声をかけながら丁寧に行った。入所者さんからは「気持ちいい。上手だね」など声が上がり好評。生徒からは「喜んでくれて、うれしかったです」など感想が聞かれた。

WEB医療講演スケジュール
Facebookで公開中！

徳洲会グループ病院では、さまざまなテーマで医療講演を開催している。オンラインで受講可能な講演を徳洲会グループのFacebookで公開中。当該病院のホームページで参加方法などを要チェック！

湘南鎌倉医療大学

「“島嶼看護”必須なのは本学だけ」

平島・名瀬病院副院長ら離島の医療者が講義

湘南鎌倉医療大学（神奈川県）は８月９日から２週間、看護学部４年生を対象に島嶼看護をテーマとした集中講義を実施した。メイン講義日の８月17日には、名瀬徳洲会病院（鹿児島県）の平島修副院長（総合内科医）、徳之島徳洲会病院（鹿児島県）の繁田明美・看護部長ら離島で活動する医療従事者が講師として登壇、限られた医療資源のなかで島民の命と暮らしを支える“現場のリアル”を伝えた。荒賀直子学長は「島嶼看護が必修科目として学べる看護大学は全国でも本学だけです」とアピール。



島嶼看護や災害看護などのカリキュラムを設ける湘南鎌倉医療大学



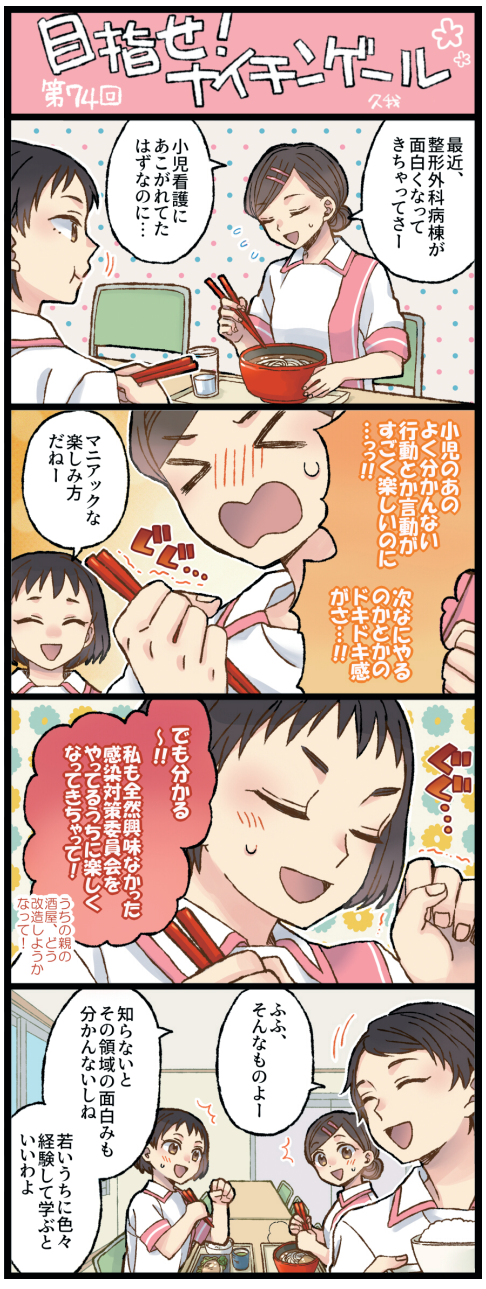
遠隔診療や専門チームにより「島内で支える医療が大切」と平島副院長

集中講義は看護学部４年生のカリキュラムに組み込まれ、例年、２週間15コマ行う。“アクティブラーニング”形式（学習者の能動的な参加を取り入れた学習法）で構成し、序盤の講義では学生が離島医療について調べ、奄美群島の瀬戸内徳洲会病院や徳之島病院にオンラインインタビューを行い、疑問点を整理する。そのうえで、中盤に離島医療に関する講義を受け、最後にテストを行い、島嶼看護について理解を深める。自治医科大学看護学部の青木さぎ里講師が講義責任者を務めた。

中盤の講義は従来、離島の医療機関に勤めていた医師が講師を務めていたが、よりリアルな情報を学生に伝えるために、昨年度、現役で離島医療に携わる平島副院長を講師として招聘。好評を博したことから、引き続き講師を依頼した。

「患者さんの生活背景に寄り添い総合的視点でのアプローチが要」

今年度は、平島副院長ら３人による講義とパネルディスカッションを青木講師も交え実施。まず平島副院長が奄美群島の医療の現状を解説し、鹿児島県全体では医師数が確保されているように見えても、離島では医師の偏在と専門医不足が深刻な状況にあると指摘した。また、島内で医療が完結できない場合、ドクターヘリによる島外搬送となるが、天候不良や重複要請でヘリがキャンセルになるといった課題があることも説明した。



平島副院長は、こうした「患者さんを運ぶ医療」だけでなく、「遠隔診療や専門チームを島に運ぶ医療」を組み合わせることで、島の医療を支える取り組みを説明。徳洲会グループはホンダジェット「徳洲ジェット」を用いた患者搬送を行っており、そのプロジェクトリーダーも平島副院長が務めている。

「治療を目的とした本土の都市部医療機関への搬送や、都市部医療機関での治療を終え、故郷の島に戻る帰島支援など“空の救急車”としての活用が広がっています」と平島副院長。看護師が数カ月単位で離島医療を体験する離島看護師支援プロジェクト「結の島ナース」なども紹介した。

最後に学生へのメッセージとして、「（島嶼看護は）マニュアルだけに頼らず患者さんの生活背景に寄り添い、つねに自分の考えや対応について問いかけながら、総合的な視点で患者さんにアプローチすることが大切です」と呼びかけた。

繁田・看護部長は、自院が島内で唯一分娩を扱う拠点として、周産期医療と母子保健の実際を報告した。徳之島は合計特殊出生率が全国トップの「子宝の島」で、地域全体で子どもを育てる文化があると説明。「ハイリスクの妊産婦や新生児への対応は、島外搬送となり、ドクターヘリや自衛隊ヘリなどを使い分けています」と繁田・看護部長。

夜間の緊急輸血に備え、職員の血液型リストを作成し献血に協力する体制など、離島ならではの備えについても披露。産後も地域全体で母子を見守り、家族と顔の見える関係を築けることが島の医療の魅力と強調した。

トカラ列島などで訪問看護に携わってきた徳洲会外のリニエ訪問看護ステーション鹿児島・大隅サービス事業本部の末永真由美・看護副部長は、物品も限られる離島の環境下で、島にある木材でつくった松葉づえを用い、末期がんの患者さんの暮らしを支えた事例などを紹介。「島にあるものを最大限に生かして暮らしと人をつなぐことが島嶼看護の原点です」と説いた。

「5年後でも10年後でもいいので離島に来てくれたらうれしいです！」

後半のパネルディスカッションでは、前半の講義後に募った学生からの質問に答える形で実施。４人の講師がパネリストとなり、学生らと離島で働くやりがいや課題を語り合った。パネリストからは、島の方々と”顔の見える関係“を築くことができ、そのぶんやりがいや手応えを感じやすい一方、全国的な少子高齢化のなかで離島の人手不足がより深刻化している課題を指摘する場面もあり、「結の島ナース」などを活用したお試し勤務や多様な人材の受け入れ、医療職・行政・住民が一体となった地域包括ケアの構築が鍵になるとの結論に、学生たちは納得した様子だった。

学生との活発な議論を終え、繁田・看護部長は「5年後でも10年後でもいいので、興味があれば離島の現場に来てくれたらうれしいです」とエールを送った。

湘南鎌倉医療大学は鎌倉市山崎に2020年４月に開学。「生命だけは平等である」という建学の理念の下、看護学部看護学科（1学年定員100人）を設け、島嶼看護や災害看護、離島での体験学習など、徳洲会グループがバックアップする大学ならではのカリキュラムを掲げている。荒賀学長は「島嶼看護が必修科目として学べる看護大学は、全国でも本学だけです」と、離島・へき地医療への貢献につながる大学の特色とアピール。

24年３月には１期生97人が看護学部を卒業。２期生（25年３月卒）は就職希望者95人全員が内定し、内定率100%を達成した。卒業生の半数は徳洲会グループ病院・施設に入職し、離島・へき地を含む全国で活躍している。22年には大学院（看護学研究科看護学専攻博士前期課程）も設け、より高度な看護実践力をもつ人材の育成を進めている。

湘南鎌倉医療大学のホームページはここから

中部徳洲会病院

「おでかけ健康講座」が好評を博し4000回超



曽根看護師を中心に年200回以上講演

中部徳洲会病院（沖縄県）が20年以上前から実践している「おでかけ健康講座」が4,000回を超えた。同院の職員が学校や自治会、企業などに出向いて健康に関する知識を伝える取り組み。主に平日に行い、受講者は累計25～30万人に上る。今年度も４～８月の５カ月間で約1万人が受講するなど好評だ。

開始当初から講師を担ってきたのが曽根史郎看護師。一次救命処置（BLS）やAED（自動体外式除細動器）の使い方、食物アレルギーへのエピペン（補助治療剤）の使用法、窒息時の異物除去など、一般の方も正しくできるような緊急時対応方法を、人形を用いて指導する。曽根看護師は、とくに学校に勤務する養護教諭がひとりで数百人の児童・生徒に対応している現状を指摘し、「教職員全員が一丸となって動ける体制づくりが大切です。そのためにも継続したい」と話す。

昨年12月からは、喜多洋嗣薬剤師も講師として活動。「診察室では聞けない健康の話」と題し、主に高齢の方々へ、服薬の仕組みや二次検診の大切さを伝えている。「地域の方々が未病（健康と病気の間にある状態）に向き合い、自身の健康について考える機会になれば」と喜多薬剤師。

最近は、湘南鎌倉総合病院（神奈川県）の救急医らの著書『学校ER』を参考書として受講者に紹介するなど、「徳洲会グループ病院の救急チームとも連携していきたい」（曽根看護師）と意欲的だ。

AIの活用をテーマにSNS勉強会

徳洲会広報部会が開催



全国から32施設が参加しSNSのノウハウを共有

徳洲会広報部会SNS分科会は８月26日、オンラインで第11回SNS勉強会を開催した。全国の徳洲会グループ32施設から広報担当者らが参加し、SNSの活用事例や生成AIの運用方法について理解を深めた。

事例発表では、まず出雲徳洲会病院（島根県）の松村一志・広報室主任が、１人体制での広報室立ち上げやデザインツールの活用、広報誌とホームページ、SNSの連携による内製化の推進や課題を発表。続いて、名古屋徳洲会総合病院の大井幹久・地域連携室職員が、健康友の会会員向けに公式LINEを運用し、イベント通知や即時情報発信による会員との交流深化、郵送コスト削減の成果を紹介した。

続いて、同分科会長である湘南藤沢徳洲会病院（神奈川県）の町田詩織マーケティング課主任が「SNSにおけるAIの活用法」をテーマに講義した。投稿ネタの発掘や文章作成、校正チェックでの生成AIの有効性を解説。プロンプト（指示文）を具体的に入力することの重要性を強調する一方、個人情報の入力禁止や医療広告ガイドラインの順守、最終的な人の目の確認が不可欠と呼びかけた。

質疑応答では、SNS投稿にかかる時間や兼務の課題など活発な意見交換を行い、グループ全体でノウハウを共有した。